
さまよえるオランダ人

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さまよえるオランダ人

【Nコード】

N6007I

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

悪魔の呪いによって七年に一度の陸にあがる時に永遠の貞節を誓う乙女の愛を得ることでは救われなくなってしまったオランダ人。その彼の前にただひたすら伝説を信じオランダ人を慕うゼンタが現れる。果たしてオランダ人は救われるのか。ワーグナーの作品の一つです。海のお話です。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

さまよえるオランダ人

第一幕 永遠に彷徨う者

ノルウエーの岸壁。荒れたこの場所に今一隻の船が近付いてきた。空は暗く激しい嵐が荒れ狂っている。海も荒れ船はそこから逃れてきたようである。

船は錨を下ろすとそこに停泊する。帆を降ろし綱を投げたりしている。その間に船長らしき男が岩場に降りてきていた。そのうえで周りを見回す。

「ダーラント船長」

船から船乗り達が彼の名を呼んで声をかける。

「そつちはどうですか？」

「問題ありませんか？」

「いや、ない」

ダーラントは低く底から聞こえるような声で彼等に応えた。船乗りの服を着ている大柄で顔中髭だらけの男だ。髭には白いものが混ざっている。それを見れば初老らしきことがわかる。少し垂れている目の尻には皺もある。だが姿勢はよく堂々としたものであった。

「何も無いぞ。だが」

「だが？」

「かなり押し流されてしまったな」

彼が言うのはそれであった。

「嵐のせいだな」

「はい、それは」

「長い航海の後でもうすぐ到着だというのに」
「ダーラントの目が曇っている。」

「こうなってしまうとはな」

「まあそれは」

「ここはザンドウィーケさ」

ダーラントはこの地名も知っているようだった。

「もうすぐだが。しかし」

「娘さんが気になるんでしょ？」

「よっ、憎いね」

「うむ、ゼンタにな」

ダーラントは船員達の言葉を聞いて娘の名を呟いた。

「会えると思っていたが今は仕方ないな」

「それでどうされますか？」

「今は休もう」

結論としてはこうであった。

「焦っても仕方ない。それでいいな」

「わかりました。それじゃあ」

「それでだ」

ここでダーラントは船乗りの一人に声をかけてきた。

「舵取りよ」

「はい」

その舵取りがダーラントの言葉に伝えてきた。

「わしは寝るがその間見張りを頼めるか」

「ええ、それでは」

舵取りは彼のその言葉に伝えて頷いてみせてきた。

「お任せ下さい」

「うん、それじゃあ頼むぞ」

ダーラントはそれに応えて船に戻る。他の船乗り達も船の中に入っていく。甲板に残っているのはその舵取りだけだが。彼も何か眠そうに目をこすりだした。

「遠い海から嵐を超えて御前の胸に戻って来た。愛しの南風に連れられて御前にこの黄金の腕飾りを」

そう歌いながらうつらうつらとしていきやがては。完全に眠りに入ってしまった。するともう一隻船がやって来た。それは実に変わ

った船だった。

マストは漆黒でありその帆は血の様に赤い。波をものともせず音も立てず海の上を進んでくる。そして岸に泊まり投錨する。やがてその船から一人の男が出て来た。

変わった男だった。服は黒いスペイン風の服だった。ズボンに服、そしてブーツとカラー。ただしそのカラーも白ではなく黒だ。帽子も黒であり何もかもが漆黒だ。陰気な顔をしており顔色は蒼い。蒼白だった。暗い黒い目をしており髪も同じ色だ。大柄であるが幽鬼の様に見える。不気味な男であった。

男は岩場に降り立つと。まずはこう呟いた。

「期限は切れた」

まずはこう。

「幾度めかにまた七年が過ぎた」

時間が言われた。

「如何にも飽きたというように海は私を陸に置く。だが高慢な海よ、御前はすぐに私を呼ぶ。そんな具合に御前の反抗は強靱だが私の苦しみは永久だ」

こう述べていく。

「私が陸に探し求める幸せを私は決して見出しはできぬだろう。世界の海のあらゆる潮よ、私は御前と運命を共にする。世界の波が全て砕け最後の水が渴くまで私は御前と共にある」

言葉を続けていく。

第一幕その二

「憧れの心もて海の淵に身を投じたことも行きたびか。帆の恐ろしき墓である浅瀬に船を追いやっても死ぬことは許されぬ。命知らずの海賊達に戦いを挑んでも彼等は十字を切つて逃げる。これが悪魔が私に与えた恐ろしい呪いなのだ。私の忌まわしい運命なのだ」

ここで彼は上を見上げた。暗澹たる空を。

「讃えられるべき天使よ、我が救済の条件を与えてくれた天使よ」
空に向かって問う。

「御前が私に救済の手立てがあると示してくれたのは私を御前の嘲笑の道具をする為だったのか!? 無駄な希望! 恐ろしくも甲斐なき妄想!」

叫びだした。

「地上の永遠なる貞節は終わりを告げた。ただ一つの希望よ不動であれ私に残されてあれ!」

心の叫びであった。彼の儂い心の。

「地に萌芽がある限りその萌芽も滅んでいく。新盤の日よ最後の日よ、御前は何時私の前に姿を現わす、この世の終わりを告げる殲滅の音は何時響く。全ての死人が蘇るその時に私は救われるのだ。宇宙よ、御前の運行を止めよ!」

そして最後に言う。

「とこしえの壊滅よ、私をとらえてくれ!」

「とこしえの壊滅よ、我々をとらえてくれ!」

船の中からも声が響く。それが終わってから船の中からダーラントが出て来た。そして眠っている舵取りに声をかけてきたのだった。

「おい舵取り君」

「はい!？」

「寝ていたのかい?」

「いえ、私は」

飛び起きて彼に応える。

「何も」

「しかしだね。見てくれ」

彼はここで舵取りに対して言う。

「あの船を」

「あの船!？」

「見えるだろう」

こう言って先程出て来た船を指差してみせる。

「あの大きな船が。見えているな」

「あの船は」

「やっぱり寝ていたのか」

戸惑う舵取りを見て顔を顰めさせる。

「全く」

「申し訳ありません」

「まあいいか。本来ならわしが見張るべきだったしな」

自分にも負い目があるからこれ以上は聞かないのだった。

「それはな。ところでだ」

「はい」

「あの船は何処の船だろう」

「さて」

ダーラントの問いに対して首を捻る。

「私にもさっぱり」

「わしもだ。全く知らん」

「そうですか」

「かなり古い船のようだな」

ダーラントはその船の外観を見て述べる。

「それはわかるが」

「そうですね。やけに不気味な感じですよ」

「うむ。おや」

ここでダーラントはあることに気付いた。

「あそこにいるのは」

「どうしました？」

「あそこだ」

こう言って岩場を指差すのだった。

「人がいるぞ。あの船の者かな」

「そうですかね、やっぱり」

「うむ。おおい」

ダーラントは早速彼に声をかけた。

「君は誰だ？何処の国から来た？」

「私か」

彼はダーラントの言葉に应えて顔を向けてきた。

「私を呼んだのか？」

「そうだ。君は何処から来たんだい？」

「遠くから来た」

まずはこう答えたのだった。

第一幕その三

「遠くからな」

「そうか、遠くからか」

「暫しここにいていいだろうか」

今度は彼からダーラントに尋ねてきた。

「嵐でここに逃れてきたのだが」

「何、困った時はお互い様だ」

ダーラントはにこりと笑ってそれを受け入れた。

「それに客をもてなすのは船乗りの義務じゃないか」

「それもそうだな」

彼はにこりともせずそれに頷くのだった。

「その通りだ」

「それでだ」

話の間にダーラントは彼のところに来た。それでさらに問うのだった。

「君の名は何とこのかな」

「オランダ人だ」

彼はこう名乗った。

「こう呼んでくれ」

「わかった。ではオランダ人」

「うむ」

この呼び名で決まった。そのうえで話を続けていく。

「私は今から祖国ノルウェーに戻るのだが」

「ノルウェー。ここからすぐだな」

「そうだ。あと少しなのにな。ここに逃れてきたわけだ」

「そうだったか」

「とりあえず難を逃れたが。君の船は大丈夫かい？」

「私の船は大丈夫だ」

「こうダーラントに答えた。

「船は堅固で何らの損傷も受けてはいない」

「そうか」

「嵐と悪しき風に追われ私は海をさすらう」

彼は言う。

「何年経ったか覚えてはいない。最早年月も数えてはいられない」

「何とまあ」

ダーラントは今の彼の話を半分ホラと思って聞いていた。だから気付かなかったのだ。

「多くの国を見てきた。しかし安息の地を見つけることはできなかった」

「そうか」

「ノルウェーだったな」

国を彼に確認してきた。

「貴方の国は」

「うん、そうだ」

「よかったら案内してくれ。謝礼はする」

「謝礼!？」

「そうだ。例えば」

懐から金貨を出してきた。

「これは挨拶にだ」

「金貨か」

「これだけある」

数枚出してきた。

「それにこれも」

「何と」

今度出してきたのは宝石であった。しかも何個もある。

「他にもあるが」

「まだあるというのか」

「さあ」

オランダ人が船に向けて左手を掲げるとすぐに陰気な男達が出て来た。誰もが白い顔をしていて亡霊の様に音を立てない。そのうえで何か木箱を持って来たのだ。

「これが宿泊の御礼になればいいのだが」

「いや、御礼などとはとんでもない」

ダーラントはもうその木箱から覗く宝玉や真珠、黄金に目を奪われてしまっていた。心も。

「これだけのものを」

「私の船の中にはまだまだある」

オランダ人は執着なぞないといった口調で述べた。

「全て貴方にあけてもいい」

「嘘だろう？」

「いや、本当だ」

オランダ人はこう答える。

「それにだ。貴方には娘がおられたな」

「うむ」

オランダ人のその問いに対して頷いてみせる。

「さっき言った通りだ」

「御会いしたい」

オランダ人はこう言ってきた。

第一幕その四

「是非共」

「ああ、いいとも」

ダーラントはむげもなく答えたのだった。

「それならばな。わしとしても異存はない」

「財宝なぞ何の意味もない」

オランダ人もオランダ人で一人呟く。

「私にとっては。愛こそが」

「いい娘ですぞ」

ダーラントは有頂天になって彼に述べてきた。

「そんなにか」

「うむ、美しいだけではなく誠実で」

「誠実と」

「そつだ、誠実だ」

オランダ人に対して念を押ししたのだった。

「素晴らしい心の持ち主だ、我が娘ながらな」

「そうか。それならば余計にいい」

「君は随分と苦勞をしたみたいだがそれはもう終わりだ」

上機嫌のままオランダ人に述べる。

「君は私の婿になる」

「夫に」

「娘のな」

「今日にでも会えるだろうか」

「風が導いてくれるさ、我々とな」

「彼女が私のものに」

オランダ人はまだ姿すら見ていないその娘のことを想い呟く。

「私に残された唯一の希望を失うまいとするのも許される。天使が私に希望を下される」

「嵐が運命を運んでくれた」

「ダーラントもダーラントで笑顔になっている。

「想わぬ幸運だ。私に財産が与えられる」

「船長」

「ここであの舵取りがダーラントに声をかけてきた。

「どうした？」

「風です」

「風か」

「そうです、南風です」

「こう彼に告げるのだった。

「南風が吹いています。これに乗れば」

「オランダの方」

「ダーラントは彼の言葉を受けてオランダ人に顔を向けるのだった。

「幸運の天使は貴方に微笑みかけている。風が吹き海は静かになっ

た」

「ええ」

「すぐに錨を掲げて帆を上げよう」

「そして向かうのは」

「故郷だ」

「はつきりとオランダ人に対して告げた。

「故郷だ、私のな」

「さあ帆を上げろ」

「錨ももういいぞ」

既にダーラントの船では海に戻るうとしていた。オランダ人はそ

の彼等を見てからダーラントに顔を戻し言うのであった。

「貴方の船が先に」

「それでよいのですな」

「はい、私の船の者達はまだ疲れていますので」

「こう言ってきた。

「ですから」

「しかし風向きが変わったら」

「御心配なく」

オランダ人は落ち着いた声で彼に述べるのだった。

「風はまだ当分の間南から吹きます」

「御存知なのですな」

「この時期のこの海も何度か航海していますので」

そのうえで言葉だというのだ。

「ですから問題はありません。すぐに追いつくことができます」

「ではそうしよう。陽のあるうちに娘に出会えればいいですな」

「是非共」

これに関してはオランダ人も同じ意見であった。

「御会いたいものです」

「では早速」

ここで彼は自分の船に乗るのであった。

「出航だ。いいな」

「了解、それじゃあ」

「出るか」

「ではオランダの方」

船に乗るところでオランダ人に顔を向けて声をかける。

「どうかついてきて下さい」

「はい、それでは」

「遠い海から嵐と共に来たのさ」

ダーラントの船から船乗り達の陽気な歌声が聞こえてくる。

「愛しい娘さん、塔の高さ程の潮に乗ってわしは戻って来たぞ」

「南風が吹かなかつたらここには戻ってこられまい」

「南風よもつと吹け」

「こつ歌うのだった。」

「あの娘がわしを待っている」

「出航だ！」

最後にダーラントの声が響いた。

「いざ故郷の港へ！」

「おうよ！」

彼等は意気揚々と出航し故郷に戻る。オランダ人もそれについて行く。まずはオランダ人にとっては希望を見出せたはじまりであった。

第二幕その一

第二幕 二人の出会い

ある広い家の中で。娘達は暖炉を囲んで陽気に糸を紡いでいる。

その中で明るく歌っていた。

「可愛い車よ元気よく回れ」

「千の糸を紡いでおくれ、可愛い車よ」

陽気に歌うのは糸に対してだけではなかった。

「私の恋人は海にいて貞淑な乙女に想いを馳せる」

「可愛い車よ御前が風を起こせばあの人も早く帰られる」

そう歌っていた。その中で一人の年輩の女が声を出す。半分白く

なった髪に高い鼻を持つ皺のある顔が目立つ。知的な顔の女だった。

「いい感じね、皆」

にこりと笑って周りの若い娘達に言う。

「皆よく進んでいるわね。それに」

「それに？」

「もうすぐ男達が帰って来るわよ」

ここでこのことを話に出してみせた。

「だからここはね」

「頑張るわ」

「だからね」

「そういうことよ。あら」

女はここで気付いた。

「ゼンタ」

背が高く青い海の瞳に白い顔と豊かな黄金の髪の女だった。顔立ちがさながら彫刻を思わせる程である。しかしその整った顔に何か思い詰めたものを持っている。そんな美女だった。青い服がよく似合っている。

「貴女は歌わないの」

「ええ、マリーさん」

その娘ゼンタはマリーに対して答えた。

「今はね」

「それに」

マリーはここで別のことにも気付いた。

「糸も進んでいないじゃない」

「そうかしら」

「進んでいないわ。急がないと恋人が帰って来るわよ」

「マリーさん、何言ってるのよ」

しかしここで娘達がマリーに対して言う。

「ゼンタはその必要がないのよ」

「急ぐ必要がないのよ」

「急ぐ必要がないの」

「だってそうじゃない」

彼女達は笑って告げる。

「恋人は海にいないから」

「山にいるじゃない」

「山に！？ああ」

こう言われてマリーもわかったのだった。

「そういうことね」

「ええ、そうよ。だからね」

「急ぐ必要はないのよ」

「お金の代わりに獲物ね」

マリーも言う。

「成程、そういうことなのね」

「そうよ。わかってくれたわね」

「そういうことよ」

「だから」

「それはそうとしても」

マリーは娘達の言葉を聞いたうえでまた言うのだった。

「ゼンタ、貴女はまた」

「また？」

「どうしてその絵ばかりを見るの？」

ここでゼンタが見ている壁にかけられた肖像画を見る。それは暗い顔をした男の絵だった。まるで亡霊の様に沈んだ顔をしている男だった。

「この絵を。いつもいつも」

「それはマリーさんが私に教えてくれたから」

「私が！？」

「ええ」

マリーに対してこくりと頷いてみせる。

「そうではなくて？この方を」

「この方」

ゼンタの言葉を聞いたマリーの顔が曇る。

「子供の頃の貴女に話した海の話ね」

「ええ。さまよえるオランダ人」

ゼンタは言うのだった。

第二幕その二

「この方のことを」

「ゼンタ、あれはね」

「言っておくけれど」

「ここで娘達がゼンタに対して言う。

「おとぎ話なのよ」

「伝説よ」

「いえ、違うわ」

だがゼンタは彼女達のその言葉に対して首を横に振るのだった。

「事実よ。この方は今も海を彷徨っておられて」

「何ということなの」

「呆れたわ」

マリーも娘達の今のゼンタの言葉には声を失った。

「本当にいると思っっているのね」

「まさか」

「いえ、いるわ」

しかしゼンタは言う。

「いるのよ。きっと」

「そんなこと言って大丈夫なの？」

「エリックが」

娘達はエリックの名前を出してきた。

「結構短気だしね」

「そうよね。この絵だって」

彼女達は言い合う。怪訝な顔であった。

「どうなるかわからないわよ」

「そうならどうするの？」

「ねえマリーさん」

ゼンタはここでマリーに声をかけてきた。

「あの歌を歌って」

「あの歌!？」

マリーはゼンタのその言葉を聞いて声をあげた。

「あの歌を!？」

「ええ、御願い」

まるで夢遊病者の様にせがむのだった。

「是非共」

「もう何度もよ」

だがマリーはこう言って拒むのだった。

「私はもう」

「歌って」

しかし彼女は断られても拒む。

「どうかあの歌を」

「そんなに言うのなら自分が歌って」

いい加減嫌気がさしたのかマリーはゼンタに言った。

「もう覚えてるでしょ? 何度も歌ってあげたから」

「私がないのね」

「ええ、私はもう糸を紡ぐわ」

マリーは半分うんざりした顔になっていた。

「貴女がね」

「わかりました。それじゃあ」

ゼンタは彼女の言葉を受けて立ち上がった。そして一人歌いはじめた。

「帆が血の様に赤く帆柱の真つ黒な船に会ったことはありませんか。

高き甲板にこの船の主、青白き男が休みなく見張っている」

不気味な歌だった。しかし彼女は何かに取り憑かれた様に歌い続ける。

「風の唸ること、綱の鳴ること。風は矢の様に早く吹く」
歌が続く。

「この青白い男にも何時か救いが来る。死に至るまで貞節を誓うこ

女がいるのなら。貴方は何時彼女を見つけるか。早くその乙女に出会えるように」

「オランダ人なのね」

「さまよえるオランダ人」

彼女達は知っていた。さまよえるオランダ人のその歌を。

「酷い嵐の前に彼は一つの岬を回ろうとした。彼はのろい恐れを知らぬ勇気で言った。『私は永久に止まらないと。悪魔がそれを本気にした』」

不気味な歌だった。それが続く。

「彼は呪われて海の上を休みなく彷徨う。しかし天使が教えた。彼の救いを」

それが何であるのか。彼女はまた歌う。

第二幕その三

「青白い男が救われるには七年ごとに陸にあがり乙女を探す。そして出会えた時にこそ救われる。救いが得られるならば彼は永遠に清められると」

「またその歌なのね」

「いい加減どれだけ聴いたのかしら」

娘達はいいい加減うんざりした顔でばやくのだった。ゼンタはまさに夢遊病患者のそれになっていた。しかしそれでも歌を続けていく。

「貴方を救うべき乙女は私。私が救うのよ」

「ゼンタ」

ここでマリーがゼンタに声をかける。

「何？」

「エリックよ」

こう言うのだった。

「エリックが来たわ」

「マリー」

ここでそのエリックが出て来た。長身で引き締まった身体に長い金髪と青い目を持っている。精悍な顔をしているが優しげな目をしている。褐色の猟師の服を着ている。

「エリック、よく来てくれたわね」

「ゼンタがまた」

「ゼンタがどうしたんだい？」

エリックは娘達に対して尋ねる。

「一体」

「またなのよ」

「あのオランダ人の歌よ」

彼女達はそれをゼンタに言うのだった。

「あの歌をまた歌っているのよ」

「どうしたものかしら」

「どうしたものって」

エリックは困った顔をしていた。どうしていいかわからない顔だった。

「もつすぐお父さんも帰って来られるのに」

「えっ、ということとは」

「つまり皆も帰って来るのね」

「そつだよ」

エリックは娘達に対して述べた。

「皆が帰って来るよ」

「嬉しい」

「皆が」

娘達はそれを聞いて笑顔になる。笑顔になってまた言う。

「じゃあ糸を紡ぐのを早くしましよつ」

「急ぎましよつ」

「それから皆で楽しく酒盛りをしてね」

「楽しく陽気にね」

娘達は笑顔で話し合い糸を紡いでいく。そうして次第に外に出ていく。マリーもまた。部屋に残ったのはゼンタとエリックだけだった。二人きりになるとエリックはゼンタに声をかけてきた。

「ねえゼンタ」

「何？」

冷たい声でゼンタは応えてきた。

「僕は考えているんだ」

「何をなの？」

「結婚のことだよ」

率直に述べてきたのだつた。

「結婚をね。考えているんだけど」

「結婚!？」

「そつだよ。僕の心はずつと君のもの」

こう彼女に告げた。

「僕は貧しいけれど獵師としての幸福を持っているから。君にその全てを捧げることはできるよ。君のお父さんは許してくれるのね」

「お父様のことはわからないわ」

ゼンタの声はやはりつれない。

「私は」

「けれどどうして君は」

エリックはなおもゼンタに対して言ってきた。

「僕を避けるんだい？」

「避けてはいないわ。ただ」

「ただ？」

「私は行かないといけないのよ」

そう述べるのだった。言いながら立ち上がる。

「何処に行くんだい？」

「お父様が帰って来るのよ」

立ち上がりながらエリックに冷たく言う。

第二幕その四

「私がお父様をお迎えしなくて誰が行くのよ」

「僕のことはどうでもいいのかい？」

「行かせて」

エリックを振り切ろうとしてきた。しかしエリックはここで言うのだった。

「私は行かないといけないから」

「見てくれ」

ここで彼は自分の右手を見せるのだった。見ればそこには幾つもの深い傷がある。その傷をゼンタに対して向けるのだった。

「この傷。見てくれ」

「それがどうしたの？その傷が」

「僕は君の為に漁をして傷付いたんだよ。それでも君は」

「私の心を疑うの？貴方に親切にしているのに」

「それでも。君は」

彼はそれでも言う。

「どうして僕を避けるんだい」

「避けてはいないわ」

「僕は貧しい」

エリックはまたこのことを言うのだった。

「君のお父さんはお金が好きだ。けれど僕は君を」

「私を？」

「何があっても見続ける。生きている限り」

「苦悩だった。それを告げる。」

「生きている限りなのね」

「何度も言っているじゃないか。僕の心は苦しい」

その苦悩さえ見せる。

「だからどうしても君を」

「私は」

ここでエリックを見る筈が。彼女はオランダ人の肖像画を見てしまった。今壁にかけられているオランダ人のその肖像画を。見てしまったのだ。

「別に」

「彼か」

エリックもまたそのオランダ人の肖像画を見た。そして言うのだ。
「た。」

「また彼を見ているんだね。さまよえるオランダ人を」

「見てはいないわ」

「嘘だ」

エリックはすぐにそれを否定した。

「それは嘘だ。さっきだってあの歌を」

「気の毒な方なのよ」

ゼンタは認めた。認めはしたが。

「それだから私は」

「彼は亡霊だ」

エリックは強張った顔でゼンタに告げる。

「亡霊を好きになろうとしてもそれは何の意味もないことなんだ」

「いえ、亡霊じゃないわ」

ゼンタはマリー達に対したようにやはりそのことを否定した。

「あの方はそうじゃないわ」

「神よ。この娘を御護り下さい」

エリックは半分絶望したように神に祈った。

「どうしてわかってくれないんだ」

「私はわかっているわ」

「わかっているじゃないんだ。さまよえるオランダ人は亡霊なんだよ」

またこのことを言う。彼も必死の顔だった。

「若し帰って来ても声をかけてはいけない。海の底に連れて行かれるだけだ」

「関係ないわ」

やはりエリックの言葉を聞くことはしない。

「そんなこと。私には」

「命が惜しくないのかい？」

「命なんて」

やはりエリックにとっては絶望の言葉だった。その絶望の言葉が彼の心を苛んでいく。どうしようもないまでに。

「どうしてだ。君はオランダ人に全てを捧げるのかい？」

「ええ、そうよ」

遂にはつきりと言い切ってみせた。

「私は。もう」

「どうしてだ。君は」

「青白い人」

もうエリックの声を聞いてはいなかった。恍惚とした顔でオランダ人の絵を見て呟いていた。

「貴方の救いは私。和私しかないのよ」

「もう駄目だ」

エリックは絶望に耐えられずに遂にその場を去ろうとした。

「僕には」

「その時はもうすぐ」

ゼンタは彼には目もくれず呟き続ける。

「もうすぐだから」

「そうか、ならいい」

エリックもここに来て遂に諦めた。

第二幕その五

「もう僕は」

彼は肩を落として部屋を立ち去った。一人になり暫しまたオランダ人の肖像画を見ていたゼンタだがそこに。ダーラントがやって来たのだった。

「お父様」

「娘よ、久し振りだね」

両手を広げて娘に対して言う。

「会いたかったぞ」

「私もっ」

笑顔で父に駆け寄り抱き締める。そのうえでまた言い合つのだった。

「待っていたわ、本当に」

「ああ。ところでゼンタ」

「何？」

父を抱き締めながら問う。

「どうかしたの？」

「うむ。実はな」

彼はここで今部屋に入って来た者を紹介した。それは。

「彼だが」

「この方は」

「御前の旦那様になる人だよ」

「はじめまして」

オランダ人だった。肖像画と全く同じ顔をしている。彼の姿を見てゼンタは声をあげそうになった。

「えっ……」

「！？どうしたのだ」

「いえ、何も」

だが言葉は何とか出さなかった。かろづじて止めたのだった。

「何も無いわ」

「そうか、ならいいがな」

「ところでこの方が」

「うん、そうだ」

にこりと笑って娘に告げる。

「この方が御前の夫になる。明日な」

「ゼンタさんですね」

「え、ええ」

戸惑いながらオランダ人の問いに答える。

「そうですね」

「オランダ人です」

彼の方から名乗ってきた。

「はじめまして」

「こちらこそ」

ゼンタはオランダ人に対して一礼してみせた。

「宜しく御願います」

「優しい娘です」

娘から離れた後で彼女を右手で指し示してオランダ人に告げる。

「何かと世話を焼いてくれます」

「そうですね」

「ゼンタ、見てくれ」

ダーラントはポケットから金の留め金を出してきた。

「それは」

「この方からの頂き物だ」

「こう娘に話す。」

「これだけではないしな」

「これだけではないのね」

「そうだ。全くもって素晴らしい」

おっとりとした声だった。しかしゼンタは父を見てはいない。オ

ランダ人をじつと見ていた。これだけではないとはオランダ人を見ての言葉だった。

第二幕その六

「この方は。それですな」

「はい」

オランダ人はダーラントの言葉に頷く。しかし目はゼンタを見ている。

「娘は優しいだけでなく貞節で」

「貞節。そうだ」

オランダ人はその言葉に反応を示した。目の色が変わったのだ。

「この乙女なのか。私を救ってくれるのは」

「幻みたいなこと」

ゼンタもゼンタで恍惚となっていた。

「まさかここでこの方に御会いできるなんて」

「苦しみを忘れ憧れを思い出す。暗い夜の営みより一人の女性を仰いだ」

「今日この日に私は報われるのね」

二人の言葉が混ざり合う。

「心に燃える暗鬱の灼熱が消えていく。愛か、いやこれは」

オランダ人は言う。

「救済への憧れか。これは」

「我が胸に萌える苦しみ、これは一体」

ゼンタもまた。ダーラントを他所に二人の世界に入ろうとしていた。

そして。オランダ人が一歩前に出た。そのうえでゼンタに対して問う。

「あの」

「はい」

「私で宜しいでしょうか」

その蒼ざめた顔でゼンタに問うた。

「私で。どうなのでしょうが」

「私は父の言葉に従います」

これがゼンタの返事であった。

「それが私の意志です」

「そうですね」

「ええ。運命が何と言おうとも」

こつも言うのだった。

「私は従います」

「そうですね。この見知らぬ者に対して」

「そのようなことは関係ありません」

だがゼンタはまたオランダ人に言った。

「私は。何があるうとも」

「そうですね。この苦しみに満ちた生活が終わり長きに渡って憧れていた休息が貴女の愛によって訪れるというのですね」

「それこそが私の生涯の勤めです」

ゼンタの言葉は変わらない。

「そう信じています」

「天使が舞い降りた」

オランダ人は呟いた。

「今ここに。これこそが救済なのだ」

「私にとって運命が舞い降りてきたのね」

ゼンタもまた呟いていた。

「今まさに」

「ですが」

ここでオランダ人はふと何かを思い出して。それで言うのだった。

「貴女がこれから私と共に歩む運命がどんなものか御存知だろうか」

「運命ですか」

「そう、その犠牲の大きさを知ったならば。永遠の貞節を守れなければ」

「貞節を守ることは女の聖なる務め」

ゼンタはオランダ人の言葉に静かに答えた。

「御安心下さい。貴方に何があるうとも私は生涯貞節を誓います」
「生涯ですか」

「はい、死に至るまでの貞節を」

「私は救済を見出した」

オランダ人はここまで聞いて空を見上げた。その顔は恍惚となっていた。

「悪魔よ不幸の星よ聞かがいい。私は永遠の貞節を見出したのだ」

「この方の船は永遠に休む。休息が今訪れる」

「さて、二人共」

ダーラントがここで二人に声をかけてきた。

「はい」

「何、お父様」

「外に出よう」

こう二人に提案するのだった。

「外では皆待っているぞ」

「皆が」

「そうだ」

今度はゼンタに対して答えた。

「我々が帰って来た御祝いだ。是非楽しもう」

「そうね」

「わかりました」

二人はその言葉に頷く。ゼンタは笑顔で、オランダ人は蒼ざめた顔で。二人は正反対な顔でそれぞれ頷いて応えるのだった。

「二人の御祝いでもある」

ダーラントは満面の笑顔だった。

「じゃあ行くか」

「わかったわ、お父様」

「救済に」

二人は部屋を出てそのまま外に向かう。外に向かい部屋には誰も

いなくなった。ただオランダ人の肖像画が闇の中に浮かんでいるだけだった。

第三幕その一

第三幕 永遠の救済

港。岩の多い入り江だった。そこには多くの船が停泊している。ダーラントの船もある。その前で皆が明るく陽気に酒を飲み騒いでいた。向こう側にはオランダ人の暗い船もある。

「舵取りよ見張りを止めよ！」

「舵取りよ我のところに来たれ！」

船乗り達は両足を派手に踏み鳴らしながら歌っている。

「帆を降ろせ錨を留めておけ」

「今日は楽しく一杯だ！」

「美女にブランデー」

「御馳走もあるぞ！」

そう言い合って派手に騒いでいる。するとそこに娘達も来た。

「あら皆」

「もう出来上がっているの」

「遅いぞ！」

「もう皆飲んでいるぞ」

彼等は口々に娘達に告げる。

「わかつたら早くここに来い」

「飲むぞ飲むぞ」

「わかつてるわよ、早く行かないと」

娘達はそれに応えて言う。

「お酒も御馳走もなくなってしまっわ」

「そうなたらお話にならないわ」

「じゃあ早く来い」

「飲むぞ食うぞ騒ぐぞ」

「それはいいが」

ここで舵取りが出て来てふと言っ。

「どうしたの？」

「舵取りさん今日はやけに神妙な顔ね」
「あれだ」

ここで彼はオランダ人の船を指差した。その周りだけがしんと静まり返っている。

「あの船はどうしたんだ？」

「物音一つしないな」

「ああ、全くだ」

船乗り達もそれに頷く。

「中には大勢いる筈だが」

「どうということなんだ、これは」

「声をかけてみる？」

娘達はこう提案した。

「少し」

「そうよね。声をかけないと駄目よ」

「それじゃあ。あの」

そうして声をかけた。

「どうですか？宜しければ」

「私達と楽しく」

だが返事はない。灯りもついていない。娘達はそれを見て首を傾げるのだった。

「返事がないわ」

「どうしたのかしら」

「聞こえなかったのか？」

「まさか」

これには船乗り達も首を捻った。騒ぎが収まっていた。

「しかし本当に声がしないと」

「灯りもないしな」

「おかしい」

彼等は言う。

「妙だな」

「そういえばあの連中」

ここで船乗りの一人が言った。

「酒も飲まないし何も食わないぞ」

「そうなの」

「ああ、そういえばそうだ」

「歌も歌わないしな」

船乗り達は次々に気付いた。思えば不思議なことばかりだった。

「妙な連中だ」

「人間なのか？」

「何言ってるのよあんた達」

「そうよ」

娘達はその彼等に対して言う。

「人間でなかったら何なのよ」

「何だっっていうのよ」

「幽霊なんじゃないのか？」

「そうだよな」

船乗り達はこう考えて述べる。述べていて次第にそのことを自分達の中で正しいと思うようになってきていた。そういつぶつに考え出していたのだ。

第三幕その二

「幽霊だったら何も食わないし何も飲まないさ」

「そうそう」

「だから。そんな馬鹿なことある筈ないじゃない」

「冗談も程々にしたら？」

「ねえそちらの方々」

娘達はオランダ人の船に対して声をかける。

「早くこつちに来て」

「御馳走もお酒もあるわよ」

しかしその言葉に対する返事は何もなかった。何もないうまま沈黙だけが支配した。娘達もそれを見て遂に船乗り達と同じことを思うようになった。

「やっぱりこれは」

「あの船にいるのは」

「なっ、幽霊だろ？」

「そうだろ」

船乗り達はここぞとばかりに娘達に言うのだった。

「さまよえるオランダ人の話は本当だったんだ」

「あの船こそが」

「そうだったら」

娘達はさまよえるオランダ人の話を聞いてその顔を一齐に青くさせた。彼女達もその話は知っていたのだ。海の携わるのなら誰でも知っている話だった。

「大変よ、起こしたら駄目」

「若しそのさまよえるオランダ人だったら」

「おおい」

だがここで船乗りのうちの数人がオランダ人の船に声をかけるのだった。

「一つ聞いていいかい？」

「君達に聞きたいことがあるんだ」

「こつ彼等に対して尋ねるのだった。」

「君達は海で岩や岩礁に困らないのかい？」

「どうなんだい？」

「やっぱり」

娘達は返事がないのでまた確信するのだった。

「返事はないし灯りもない」

「どういふことなの？」

「手紙はないのかい？」

船乗り達はまた彼等に問う。今度は数が増えていた。

「だから彼等は幽霊だから」

「もう」

「帆をあげてみないかい？」

水夫達はまた船に問う。

「さまよえるオランダ人の船の速さを見せてくれ」

「早くな」

「だから止めてって」

「何が起るかわからないわよ」

娘達はいい加減怖くなって船乗り達を止める。

「わし等でやるか？じゃあ」

「そうするかい？」

「どうしたらいいの？」

「やっぱりここにいたら危ないんじゃない」

娘達は不安な顔になって言い合う。不安と恐怖が彼女達の胸を支配していた。

「帰った方が」

「何を言ってるんだ」

「怖気付くなんてな」

「おおい、こつちに來てくれ！」

また彼等は声をあげた。

「お隣さん、早くこっちに来な！」

「お酒に御馳走があるぞ！」

こう歌って勧めるのだった。やはり足をステップさせている。

「見張りを止めてこっちに来て楽しくやろう！」

「塩水じゃなくて美味しい酒を飲もう！だからこっちへ！」

そう歌っているところで。遂にオランダ人の船に灯りが宿った。

しかしそれは青白い、朧な火だった。その火を見て船乗り達も娘達も驚きの声をあげた。

「あの火は」

「やっぱり」

確信が断定になったその瞬間に。オランダ人の方から不気味な声が聞こえてきたのだった。まるで海鳴りの様に聴こえてきたのだった。

「何だあの声は」

「まるで」

「嵐は陸に向かって吹く、帆を上げよ錨を掲げよ入江の中に船を入れよ！」

彼等は口々に歌う。断末魔の海鳴りの声だった。

「黒き船長よ陸に！嵐は結婚の音楽を奏で大洋はそれに合わせて荒れ狂う。耳を傾けよ。悪魔が口笛を吹いている！」

口々に歌う。不気味な歌を。

第三幕その三

「船長よ沖に！」

「成功しなかつた救いに乾杯！」

歌が続く。その不気味な歌が。

「どれだけ嵐が喚こうと我等の帆はびくともしない。悪魔が我々を不死とした。我々は永久に死ぬことはないのだ！」

「何という歌だ」

「今の歌は」

オランダ人のその歌を聴いて皆身震いせずにはいらなかった。

最早酒も醒めていた。

「そんな歌ではない、我々と一緒に歌えばいい！」

「さあ、だからここで！」

しかしそれも適わない。悪魔の如き歌が続く。そうしてその歌がまた歌われ。船乗り達も娘達も遂に恐怖に包まれその場から逃げ出したのだった。

後に残ったのはまずは亡霊達の哄笑とその後の沈黙。後には何も残ってはいなかった。不気味な沈黙だけがそこにあった。

ゼンタの家の前。彼女が家を出るとそこでエリックがやって来た。すがるようにして彼女に声をかけてきた。

「ゼンタ、ここにいたんだ」

「エリック、何なの？」

ゼンタはそのエリックに顔を向けるのだった。

「何かあるの？」

「ゼンタ、話は聞いたよ」

怯えるような顔でゼンタにまた言う。

「お父上が連れて来たあの男と」

「そのこと？」

「そのことってつまり」

エリックはもうこれだけでわかった。それだけで。

「やっぱりそうか、そうなんだ」

「あの人のことが。どうしたの？」

「エリックに関係はないわ」

「関係ある。君はあのはじめてこの港に来た男に対して」

「そんなことは」

「だから言っているじゃない。貴方はもう」

「もう!？」

強張った顔でゼンタに声をあげた。

「もう。何なんだ」

「私はもう貴方を見てはいけないの」

エリックから顔を背けさえする。

「だから来ないで欲しいのよ」

「貞節を誓っているのか？」

「貞節!？そうよ」

エリックの言葉に頷いてみせる。

「私は誓って言うわ。私の貞節はあの方にだけ」

「あの方にだけ!？そうか」

「ええ、そうよ」

ゼンタも少しムキになっていた。

「だからもう」

「思い出してくれ、ゼンタ」

絶望に支配されながらも哀願する顔でゼンタに言ってきた。

「あの谷に君が私を呼び寄せたことを。君の為に高山の花を危険を冒して採って来たことを」

そのことを話すのだった。

「君を頼むとお父上に言われた時。君は言った筈じゃないのか？」

そしてまた言う。

「お互いに手を握って言うてくれたじゃないか」

必死に言うのだった。だがそれはゼンタには届かない。それより

もそこに偶然いたオランダ人がそれを聞いて発作的に叫ぶのだった。

「終わりだ、もう終わりだ」

頭を抱えて叫びだした。

「やはり私は幸せは」

「何っ、まさか」

エリックはその声が出た方に顔を向けた。するとそこには。

「やはり、オランダ人」

「ゼンタよ、さようなら」

オランダ人はゼンタに別れを告げて走り去ろうとする。だがそこを素早く回り込んだゼンタは彼の前に出て必死に止めるのだった。

「待って下さい、不幸な方」

「ゼンタ、何をする気なんだ」

「海へ」

オランダ人は絶望した顔で叫ぶ。

「永遠に海に戻る。私の救済を捨てて」

「救済を捨てて」

「そうだ」

その絶望した顔で述べた言葉だった。

第三幕その四

「これでいいのだ、貴女にとっても」

「やはりあの男は」

エリックは彼の叫びを聞いて確信した。

「貴方は言っではいけません」

ゼンタはその彼を必死になって止める。

「私がいるから」

「帆を上げよ！」

だがオランダ人はそれに構わず港に見える己の船に告げるのだった。

「錨を掲げよ。この国に永遠の別れを！」

「永遠の別れ!？」

「そうだ！」

「あっ、お待ち下さい！」

「ゼンタ！」

オランダ人はゼンタを振り切り港の方へ駆けて行く。ゼンタはその彼を必死に追いエリックはそのゼンタを追う。そうして瞬く間に港に辿り着いたのだった。

「海に出てまたさまようのだ」

オランダ人は絶望した声で呻く。もう己の船のすぐ側に来ている。

「それが私の運命なのだから」

「私を疑うのですか!？」

ゼンタももうそこに来ていた。エリックもそこにいた。

「恐ろしい。ゼンタ、君は」

「全ての貞節は失われた」

オランダ人の絶望がさらに深まった。

「だからもう。私は」

「いえ、私は護ります」

それでもゼンタはオランダ人に対して言う。彼女もその固い心で。
「ですから」

「では言おう」

オランダ人は遂に名乗りだした。

「我が名を。我が名はさまよえるオランダ人！」

「やはり！」

エリックはそれを聞いてやはりと思うと共に顔を強張らせた。

「そうだったか。さまよえるオランダ人！」

「数え切れぬ程の死さえも私にとっては快樂、一人の女性だけが私を呪いから解放する。死に至るまでの貞節を守る女性だけが！」

「それは」

「貴女は貞節は誓ったがそれは永遠のものではなかった」

「いえ、それは」

「言うな。それが貴女を守ったのだ。私に誓った貞節を破った者には永遠の劫罰が襲う。私はそれを幾度も見てきたからだ」

それがオランダ人の宿命だったのだ。貞節を求めそれが破られた時の劫罰を見てきた。それこそが彼が味わってきた宿命だったのだ。

「さらば！」

オランダ人は踵を返して叫ぶ。

「我が救済よ、永遠に失われよ！」

「大変だ！皆、来てくれ！」

去ろうとするオランダ人に対してエリックは必死で助けを呼ぶ。

「ゼンタが！ゼンタが！」

「どうした！」

「どうしたエリック！」

それを聞いてダーラントもマリーも皆も出て来た。出て北誰もが驚愕の色をその顔に思い浮かべる。そこに見てはならないものを見たからだ。

「待って下さい！」

だがゼンタは一人その中でオランダ人を呼び止めていた。

「貴方の運命はよく知っています。もうそれは既に」
そのことを言うのだった。

「貴方の苦しみが終わる時が来たのです。永遠の貞節を持っている
その女こと私です。貴方を救う女性こそが私なのです」

「助けてくれ！皆！」

エリックはゼンタがオランダ人を見る中で必死に皆に声をかけ続
けている。

「亡霊が！亡霊が！」

「ゼンタ、行くな！」

「恐ろしいことになるぞ！」

「見て、あの船！」

マリーが蒼ざめた顔でオランダ人の船を指差した。そこにあるの
は。

黒い漆黒のマストが高々とありその帆が赤い血の色になっている。
青白い炎を宿らせたその船を。今その船の錨が掲げられた。

「さあ、出港だ！」

「いえ、なりません！」

船に飛び乗ったオランダ人に対して叫ぶ。

「貴方の天使の心を御覧下さい！」

港の一際高い場所、岸壁にその身を置いた。

「私はここで貴方に死までの貞節を誓います！」

「ゼンタ！」

「ゼンターーーーッ！」

エリック達の声も聞かず一人その岸壁から身を乗り出した。する
と嵐が起こり海を荒れさせる。その中にオランダ人の船だけが沈め
られる。そしてその嵐が一瞬で消えて何と海の中から船が浮かび上
がる。船は高々と空に昇っていき天界へと消えていく。全ては救わ
れた。遂に永遠の貞節がさまよえる男を救い出し彼を天国の平和へ
と誘う。エリック達はただその光景を見ているだけだった。暗雲を
裂いてそこから覗き込む黄金色の光に導かれ空を昇るオランダ人の

船を。救済が適えられたのを見ていた。

さまよえるオランダ人 完

2008・6・6

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6007i/>

さまよえるオランダ人

2011年4月28日00時57分発行